

植物に関する色名

増田, 絹子

九州大学大学院生物資源環境科学府植物資源環境科学専攻植物機能利用学講座植物機能利用学研究室

松尾, 英輔

九州大学大学院生物資源環境科学府植物資源環境科学専攻植物機能利用学講座植物機能利用学研究室

<https://doi.org/10.15017/21077>

出版情報 : 九州大学大学院農学研究院学芸雑誌. 55 (2), pp.161-168, 2001-02. 九州大学大学院農学研
究院

バージョン :

権利関係 :

植物に関する色名

増田 絹子*・松尾 英輔

九州大学大学院生物資源環境科学府
植物資源環境科学専攻植物機能利用学講座
植物機能利用学研究室

(2000年10月31日受付, 2000年11月10日受理)

The Color Names Related to the Plants

Kinuko MASUDA* and Eisuke MATSUO**

Laboratory of Applied Plant Science, Division of Applied Plant Science,
Department of Plant Resources, Faculty of Agriculture,
Kyushu University, Fukuoka 812-8581

はじめに

私たちの身の回りは、じつに多くの色に囲まれている。たとえば、真っ赤な太陽、緑の森、青い空、というように、何気なく目にしているさまざまなものには、必ずそれに対応する色を、私たちは連想する。私たちは、体験したことを、常に色とともに記憶をしているのではないだろうか。自然現象への人々の連想は一般に共通なもので、そこから共通した色の感情が生まれることがある。色名はこのような連想から来たものが多い(日本色彩研究所, 1977)。

また、色名は、人が色を伝え合うときに、その名前をいわれて、連想しやすいものでなければならない。したがって、色名となったものには、私たちの生活と深くかかわりあっているもの、その存在がよく知られていて、身近にみられる自然現象や事物に由来するものが多い。

いいかえると、私たちは無数にある身の回りの自然現象や事物のなかから、共通のイメージをもつことができ、その意味や由来がわかりやすいものを選択して、色名を表現してきたのである。このような“色が由来するもの”に注目することは、私たちの生活と深くかかわっているものが何であるか、を探るうえで大

きなヒントを与えてくれる。

今日、カラーセラピーや、カラーコーディネーター、色彩検定など、社会的にもあらゆる角度から“色”が注目され、それに応じて、さまざまな色に関する資料がでてくる。ところが、これらの資料では、どのような色か、またその色は何をもとにつくりだされる色か、どのように発色させるかなど、その主点が“色”そのものにあり、“色(名)が由来するもの”に主点をおいたものは少ない。

本研究では、人間の生活や文化と切り離すことができない“色”について、“色名が由来するもの”、そのなかでもとくに“植物”に関するものを取り上げて分析した。

方法、結果および考察

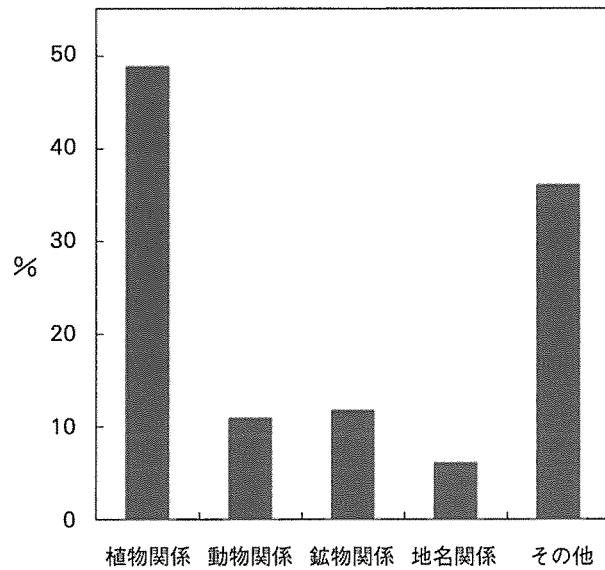
1. 色名の数と植物に関する色名

植物に関する色名を調べるためには、まず、現在どのような色名があるのか、色名全体を把握する必要がある。そこで、1931年から1996年までに出版された、色名に関する資料からすべての色名を拾いあげた。(和田, 1931, 1954; 上村・山崎, 1943; 前田, 1960; 武井, 1973; 日本色彩研究所, 1974, 1977; 向学図書編, 1986; 城, 1986; 福田, 1987; 梅棹ら, 1995; ネ

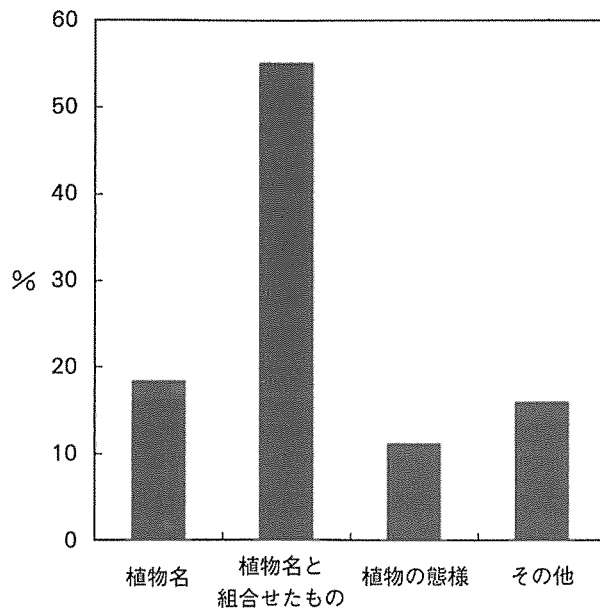
* 九州大学大学院生物資源環境科学府植物資源環境科学専攻植物機能利用学講座植物機能利用学研究室

* Laboratory of Applied Plant Science, Division of Applied Plant Science, Department of Plant Resources, Graduate School of Bioresource and Bioenvironmental Sciences, Kyushu University

** Corresponding author (E-mail: eisuke-m@agr.kyushu-u.ac.jp)



第1図 色名の分類



第2図 植物関係の色名の分類

イチャープロ編集室, 1996)

これらには, 1981種類の色名が記載されていた。それらのおよそ8割は「自然」にちなむもので, それぞれ植物, 動物, 鉱物, 地名に関係するものに分類できる。なお, 分類するにあたり, 小豆鼠のように, 植物

(小豆), 動物(鼠)のどちらにも関係している色名は, 植物関係にも動物関係にも属するものとして, ダブルカウントした。

その結果, 植物関係の色名48.7%, 動物関係10.8%, 鉱物関係11.6%, 地名関係6.0%, その他36.0%と,

第1表 植物名に由来する色名 (植物名が色名になった例)

和名	和名	和名	英名	カタカナ名	英名	カタカナ名	英名
あい	藍	すおう	蘇芳	*アイビー	ivy	バイオレット	violet
*あおい	葵	すみれ	菫	*アイリス	iris	*バナナ	banana
あかぬき	夏	せきちく	石竹	*アザレア	azalea	*ハニーサクル	honeysuckle
*あま	小豆	だいだい	橙	アブリコット	apricot	*パプリカ	paprika
あやめ、しょうぶ	狸	たばこ	煙草	*アマランス	amaranth	パンジー	pansy
あんず	杏	*たんぽぽ	蒲公英	*ウイステリア	wistaria	*パンブー	bamboo
いちご	苺	ちや	茶	*ウォルナット	walnut	*パンブキン	pumpkin
うごん	苺	ちようじゆん	丁子	*エッグプラント	eggplant	*ピアシンス	hyacinth
うのはな	卵の花	つづし	長春	*オキキョウ	ebony	*ピーチ	heather
うめ	梅	つばき	薔薇	オリーブ	orchid	ピーチ	peach
えび、ぶどう	蒲葦、薔薇	つゆくさ、ちぐさ	露草	オレンジ	olive	ビスタシオ	pistachio
おうち	棟	つるぼみ	樓	*カーネーション	orange, carnation	ピメント	pimento
おみなえし	女郎花	とうもろこし	玉蜀黍	*カメリア	camellia	ピンク	pink
かいどう	海菜	とくさ	水蕨	*カンパニユラ	campanula	フクシヤ	fuchsia
かき	柿	なし	梨	クレープ	grape	ブラックカラント	black currant
かきつばた	杜若	なたね、なのはな	菜種	*グレープフルーツ	grapefruit	フラックス	flax
かぼ	蕪	なでしこ	肉桂	*クロッカー	clover	ブラックベリー、ブランブル	black berry, bramble
からし	蕪	*にんじん	人参	*クロッカス	crocus	プラム	plum
かりやす	芥子	はぎ	萩	コーン	corn	*ヘイズル	hazel
かんぞう	苧安	はじ、はぎ	黄檗、檜	*コクリコ	coquelicot	*ペパーミント	peppermint
かんとう、ふき	菖草	はねず、はちす、にわうめ	朱華、檜	コスモス	cosmos	*ヘリオトロープ	heliotrope
かんらん	款冬	はねず、はちす、しやうび	薔薇	*サテンウッド	satinwood	*ベルアラワー	bellflower
ききょう	桔梗	*ひまわり	向日葵	サフラン	safran	*ヘンナ	henna
*きずいせん	黄水仙	ひわ	批把	*サルビア	salvia	*ホースチエスナット	horse chestnut
きはだ	黄蘗	ふじ	藤	*サンフラワー	sunflower	*ホイート	wheat
きやら	伽羅	ぼたん	牡丹	*シクラメン	cyclamen	*ポムグラニツト	pomegranate
くちなし	梔子、支子	まつ	松	*シスル	thistle	ポネセウ	ponceau
くり	栗	みかん	蜜柑	*シナモン	cinnamon	マスタード	mustard
くろ	胡桃	みる	海松	*ジヤスミン	jasmine	マダー	madder
くれない	胡蝶	むらさき	紫	*ジュニバー	juniper	*マホガニー	mahogany
くわ	桑	もくらん	木蘭	*ストロベリー	strawberry	*マリゴールド	marigold
こ	柑子	もも	桃	*スペアミント	spearmint	マルーン	maroon
こうじ	紅麴	やなぎ	楊柳	*セラニウム	geranium	*マルベリー	mulberry
こうばい	小麦	やまぶき	山吹	*タメリック	turmeric	マロー	mallow
こむぎ	小麦	やまもも	百果	*タイガー・リリー	tiger lily	*マンダリン・オレンジ	mandarin orange
さくら	桜	ゆり	蓮	*ダフニ	daphne	*ミスルトー	mistletoe
さざくろ	柘榴	よもぎ	薺	*ダムズン	damson	メイズ	maize
ささ	笹	りんどう	山葵	*タンジェリン・オレンジ	tangerine orange	*メロン	melon
さしおん	紫苑	わさび	山葵	*ダンディライアン	dandelion	モーブ	mauve
したん	紫菀	*わすれなぐさ	勿忘草	チーク	teak	ライラック	lavender
				*チェスナット	chestnut	ラベンダー	lavender
				*チェリー	cherry	ルーピン	lupine
				*アルフィニウム	delphinium	レモン	lemon
				*ネクタリン	nectarine	ローズ	rose
				*バーチ	birch	*ローズウッド	rosewood

*1974年以後から使われている色名

植物に関係する色名が圧倒的に高い割合を示した(第1図)。

このように、植物に関係する色名が多いことは武井(1998)も指摘しているところであるが、その理由として、植物が私たちの身近にあり、食べ物、飲み物、医薬、衣料、染料、建築素材、宗教行事用などとして、多くの人々に親しまれているため、その名前から色を想像、連想しやすいからと考えられる。

つぎに、植物に関係する色名をさらに分類したのが、第2図である。あい色、もも色のような植物名(藍、桃)が色名になったもの、すなわち植物名に由来する色名(ここでは植物色名と称す)が全体の18.2%、植物となにかをくみあわせた色名が55.0%、若草色など植物の態様をあらわす色名が11.0%であった。植物となにかをくみあわせた色名には、たとえば基本色をくみあわせた藍白、動物をくみあわせた藍鼠、鉱物をくみあわせた藍鉄などがある。

色名をなにかとくみあわせれば、無限に色名の数はふえる可能性がある。前述のくみあわせた色名の大部分は植物色名を使ったものであった。したがって、単独あるいはくみあわせで植物色名が使われている色名は、植物に関係する色名のおよそ7割になる。このことは、植物がいかに身近で、色を表現するのに便利であったかを示唆するものであろう。

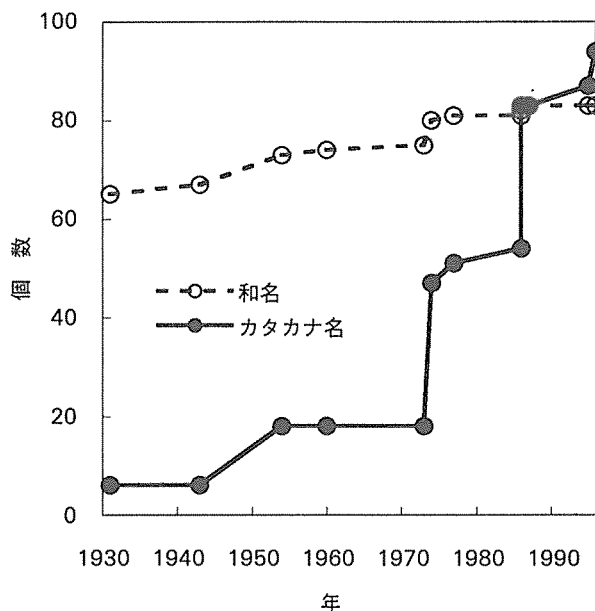
植物の態様をあらわす色名の割合はやや低い。そのなかでは、特定の植物の葉色を表現した松葉色、柳葉色など、また変化する葉色を表現した若草色、若葉色、紅葉色など、葉に関係する色名が多い点が目立った。日本では、マツやヤナギなどが街路や公園、庭などで観賞され、また四季の変化に伴う葉色の変化が顕著である。そのため、それらが色名として取り上げ易かったのであろう。

2. 植物名に由来する色

第1表は、植物名に由来する色名(植物名が色名になったもの)をまとめたもので、全部で177種類ある。それらは、日本で古くからみられる伝統的な植物に由来し、一般にひらがなで表示される色名(ここでは和名と称す)と、欧米語の植物名に由来し、カタカナで表示される色名(ここではカタカナ名と称す)とに大別される。前者は83種類、後者は94種類とわずかながら後者が多かった。

このようなカタカナ名は園芸分野では、植物の名前としては、戦後に著しく多くなってきているが、色名としても戦後、とくに1970年代になって急激にふえている(第3図)。

それらのなかには、従来和名で表現されていた色名がカタカナ名で表現されるようになっているものもある。たとえば、橄欖色がオリーブ色、紅梅色がピンク



第3図 植物名に由来する色名の個数の推移

色などの例がそうである。

このように、カタカナ名で表示される色名がふえたのは、1970年代が日本の高度成長期にあたり、海外の植物が大量に日本に入ってきたことが一因と考えられる。たとえば、赤と黄色の中間の色系統は、橙という和名よりも、オレンジという英語で呼ばれることが多くなっているが(福田, 1999)、これは橙という字が当用漢字には無いばかりでなく、橙の果実を見る機会が最近の生活では少なくなり、その一方で、オレンジはスーパーマーケットや、八百屋などでよく見かけるようになったため、オレンジの方が橙よりも知られるようになったからであろう。

日本の色名全体を、色相別に分類すると、赤(16%)、オレンジ(9%)、茶色(14%)、黄色(15%)、黄緑色(7%)、緑(10%)、青緑(3%)、青(13%)、青紫(2%)、紫(7%)、赤紫(4%)となる(武井, 1998)。

同様に、177種類の植物名に由来する色名(第1表)をみると、赤(17.5%)、オレンジ(15.8%)、黄色(15.8%)、茶色(12.4%)、緑(7.3%)、青(4.0%)、紫(23.2%)となっており(第4図)、色名全体と比較すると、青色の占める割合が低い。

第1表をみると、色名となった植物には花を觀賞するものが多い。安田齊氏によると、日本における被子植物の花色の割合は、白(32.0%)、黄色(30.2%)、赤から橙(9.6%)、青から紫(23.2%)、緑(5.0%)

(城, 1997)となり、白と黄色の占める割合が圧倒的に高く、赤から橙色の花が少ない。にもかかわらず、白色を示す植物色名は、卵の花色のみであり、前述のように赤から橙色を示す植物色名が多いことは興味深い。

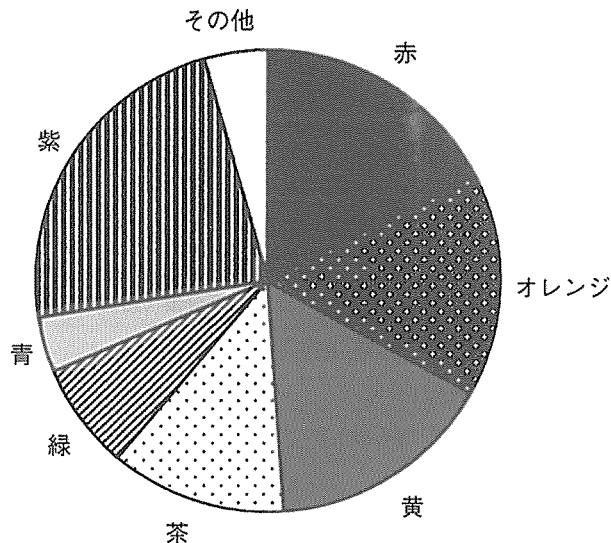
武井(1998)によると、多くの色相のうち、歴史的にみて人々が一番興味をひかれてきたのは「赤」である。つまり、「赤」は魅力的な色であるため、人々は赤系統の色を示す植物を色名として多く取り入れてきたのかもしれない。

また、色名全体と比較して青系統の色を示す植物色名が少なかったのは、花色には純粋な青色というよりは紫色がかかったものが多く、青色を示す植物が少ないからと考えられる。

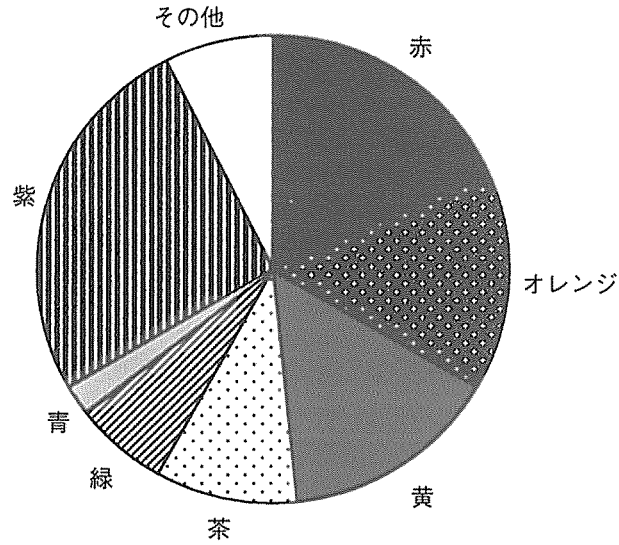
前述のように、1974年を境にカタカナ名の色名が著しく増えていた(第3図)。そこで、1973年以前に出版された資料に掲載された色名と、1974年以後に出版された資料に新たに掲載された色名との、色相別の割合を比較した。

まず1973年以前では、赤(18.3%)、オレンジ(15.1%)、黄色(15.1%)、茶色(9.7%)、緑(6.5%)、青(2.2%)、紫(25.8%)となり(第5図)、1974年以後では、赤(16.7%)、オレンジ(16.7%)、黄色(16.7%)、茶色(15.5%)、緑(8.3%)、青(6.0%)、紫(20.2%)であった(第6図)。

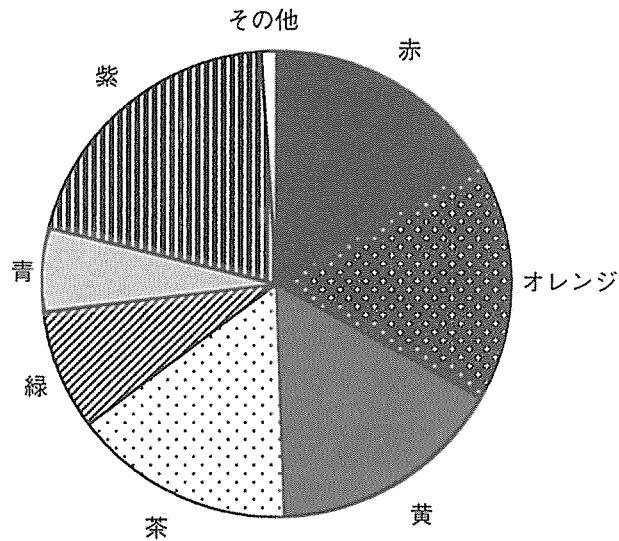
日本における植物名に由来する色名としては、赤、



第4図 植物名に由来する色名の分類



第5図 植物名に由来する色名の分類 (1973年以前)



第6図 植物名に由来する色名の分類 (1974年以後)

オレンジ、黄色など暖色系統、および紫系統の色名が、昔から多く使われている。そして、1970年代に導入された欧米語に由来するカタカナ名の植物色名の場合でも、同じように、赤、オレンジ、黄色など暖色系統、および紫系統の色名が多い。

これらは、前述の武井(1998)による日本の色名の分類の結果、すなわち赤から黄色までの暖色系の色の

占める割合とほぼ同じである。

つまり、私たちは色(とくに暖色系の色)を、身近なもの(植物であれ、他のものであれ)をもちいて、表現してきたが、1970年代以後に導入された植物色名についても、この傾向は変わっていない。ただし、後でふれるように、くすんだ色より派手な色が多くなっている点は周知の事実である。

なお、わずかではあるが、茶系統の色名が1974年以後にややふえているのは、興味深い。考えられる理由のひとつとして、チークやマホガニーなどが家具や建材として輸入され、またウォルナットなどの木の実が商品として出回るようになったことがあげられよう。

おわりに

色の名前となった植物は、私たちと深くかかわりのあるものである。日本では、四季があることから、じつにさまざまな植物に恵まれている。それらの植物は、それぞれ大変美しい彩りの世界を、私たちに与えてくれる。私たちが、それら植物に対してある種のあこがれをいただき、色名としてもちいたことは、当然のなりゆきであろう。

比較的最近になって、欧米語に由来するカタカナの植物名に由来する色名が増えてきた。これらの色は、くすんだ中間色が多い日本古来の色とはちがって、原色に近い派手な色が多い。そのような色をもつ植物が、私たち日本人の目には珍しく映り、好まれるようになり、つぎつぎと導入されてきたため、色名になったものと考えられる。

色をあらわす言葉として、和名よりもカタカナ名の色名が多くなったことは、私たちの生活のなかで、欧米語に由来する植物が増えてきていることの表われといえるかもしれない。

また、このことは、色名に関して混乱が起きていることを示唆している。福田(1999)によれば、ピンク、オレンジなどは、すでに小学生の間でも常識的に知っている英語の色名であるが、本来の色や言葉の意味とは無関係に使用されている英語風の色名も多く、これらの国籍不明の色名が、色の呼称を必要以上に複雑にしていることも事実である。

このように、色とそれが表す意味やその由来するものが遊離してきていることは、ある意味では、私たちの生活とそれを支えている身近な事物や現象とが、

遊離してきていることを示しているのではなからうか。

要約

色名全体のうち、植物に関する色名はほぼ50%と非常に高い割合を占めた。その内訳をみると、植物名に由来する色名(植物色名)18.2%、植物名となにかをくみあわせた色名55.0%、植物の態様を示す色名11.0%であり、単独あるいはくみあわせて植物色名が使われているものが多かった。

1970年代に、多くの欧米語に由来するカタカナ名の植物色名が導入されたが、日本の植物色名を色相により分類すると、1970年代の前後のいずれについても、赤、オレンジ、黄色など暖色系統、および紫系統の色名が多かった。

文献

- 上村六郎・山崎勝弘 1943 日本色名大鑑. 甲鳥書林, 東京
 梅棹忠夫ら 1995 日本語大辞典, 第2版. 講談社, 東京
 向学図書編 1986 色の手帖. 小学館, 東京
 城 一夫 1986 カラーアトラス5510 世界慣用色名色域辞典. 光村推古書院, 京都
 城 一夫 1997 色彩博物館. 明現社, 東京
 武井邦彦 1973 日本色彩事典. 笠間書院, 東京
 武井邦彦 1998 色彩の再発見. 時事通信社, 東京
 日本色彩研究所監修 1974 色名チャートシステム. 日本色研事業, 東京
 日本色彩研究所監修 1977 色名事典. 日本色研事業, 東京
 ネイチャープロ編集室 1996 色々な色. 光琳社出版会社, 京都
 福田邦夫 1987 日本の伝統色 色の小辞典. 読売出版社, 東京
 福田邦夫 1999 色の名前はどこからきたか. 青娥書房, 東京
 前田千寸 1960 日本色彩文化史. 岩波書店, 東京
 和田三造 1931 色名総鑑. 春秋社, 東京
 和田三造監修 1954 色名大辞典. 東京創元社, 東京

Summary

Of all the 1981 color names in Japan, 48.7% are related to plants. Of these plant-related color names, color names derived directly from plant names accounts for 18.2% (comprising 177 species). Those color names, which include another words combined with plant names account for 55.0%. 11.0% of the colors related to plants are derived from the mode of plants most of which are colors of leaf such as young leaf, young grass, pine leaf, willow leaf, young bamboo, etc.

High rates of the color names coming from plant species belong to the system of the warm colors such as red, orange and yellow and the system of purple.

In the 1970s, many color names originated from English plant names were introduced. Their rate of use in warm colors system is the same as the rate of use of traditional Japanese plant names, thus the introduction of English common plant names into the color names did not alter the over all predominance of warm colors.